

フィンランドの想ひ出 (三)

本間不二男

九、ラームステット博士

石井氏の好意に甘へて十二月一日の夜同家に招かれて幾度目かの夕食を御馳走になり、冬の夜長をラームステット(G. J. Ranstedt)博士の種々な話を聞きながら過した事がある。

ラームステット博士はフィンランド共和國初代の註日公使として一九二〇年頃の數年を我國で過された著名の蒙古學者にして、今日ヘルシンキ大學講師として其の方面の研究を續けて居られる。博士は蒙古語は勿論支那語、朝鮮語、日本語等東洋語をよくせられ、當夜も夜半過ぎる迄終始日本語を以つて語られたのである。

ラームステット氏の蒙古研究の功績は私の知る所ではないが博士は十九世紀の末から今日迄

前後三回程外蒙古の探檢に従事し或は外蒙古政府の顧問として舊帝政露國より彼地に派遣され支那領だつた外蒙古の民に世界の廣さを知らしめ又大いに獨立心を喚起せしめたことを自から語つた。此の種の外交秘史の斷片と交錯して話された蒙古人の民族性の中で特に私の心を引いたのは蒙古人の純情を物語る切々たる一條の場面であつた。

ラームステット博士の第一回外蒙古探檢中の一日彼れは一小部落に小憩の後其處を去らんとして、家人に其の日のその後の行程を尋ねられたことがあつた。彼れは其處でその行先を告げて去つたのである。然るに夕刻に入つて彼れの乗馬は病を起し目的地の遙か手前で斃れて仕舞

つたのであつた。外蒙の夜は殊の外寒く到底野宿等思ひもよらぬことで、彼は殆ど凍死を決心しなければならなかつた。然るに暫らくして我が來し方に馬一頭を引きつれて急ぎ馳せつけて來る一騎士を望見したのであつた。而して近づくに従つて此の騎士は先き程彼の行先きを尋ねた蒙古人であることを發見したのである。彼の語る所によれば博士の馬の目は部落を去るときに既に其の腹痛を訴へてゐたのであつた。そこで彼は博士の去つた後博士の生命が心配になつてたまらず、遂に馬を一頭率ゐて彼れの後を追つたのであつたとのことである。眞に曠莫として人煙稀れる原野に牧草を追ふて生活する彼等によりさうな話である。蒙古人は此の親切に加ふるに徹底的に互に信頼し合ひ虚言を吐く習慣がなく、爲めに次第に支那人やロシア人の虚言に乗ぜられてその生命、財産を失つて行くので彼等の氣風は急速に荒み、外人に對して猜疑心を深め最後の探險の際には彼は蒙古人の誤解

を受けて將さに殺されんとし、遂ひに其の後再び蒙古に入ることと思ひ止つたとのことであつた。此の短い語の中に亡び行く純朴なる民族の姿が鮮かに描き出され惻々として感慨措く能はざるものがあつた。

一〇、フィンランド人の國民性

ラームステット博士の話は之より漸やくフィンランドに入つた。彼の語る所によればフィンランド人はかつて森や湖岸に住み狩獵を生業とした故に元來靜寂孤獨を好み極めて寡言ださうである。彼等は隣人と繁く交ることを好まず、互に數町も離れて住み一週間に一度位隣人の安否を氣附かつて様子を見に行くのであるが、然もその家には入らず窓越しに内部の様子を窺つて一同無事であればその儘歸り、家族には隣人が今週も無事に暮してゐる様に見えたと一言告げるだけださうである。之はロシア人が農業を営み集團生活に慣れ頗る社交性に富むのと著しい相違である。

第十六圖

森と湖の國フィンランドの平凡な一風景



或る年の夏ウクライナから一友人を迎へ、氏は彼と共にフィンランドの或る有名な海岸の景勝地に遊び、乗つて來た自轉車を麓に捨てて小丘に上り四方の景色を展望して居る内、彼方から人々の連れ立つて來るを認め、友は彼に彼等は

何處の國人であるかを尋ねたので、そのロシア人であることを答へた所、友人は矢庭に山を下り出したので彼も驚いて彼れに従つた所、彼は麓に置いた自轉車の失はることを心配したのであつた。ロシア人たる彼が自らロシア人は甚だ盜癖のある道德觀の低い國民であることを告白したので博士は更に驚いたさうであるが、フィンランド人には彼の如き忌むべき性質は殆どないのである。日本人の所謂ロシア通がよくロシア人を純朴愛すべき農民として紹介されるが、近時ロシアの外交に露はるる狡猾さは又た一面此の如きロシア國民性の暴露に外ならぬことを茲に想起したいものである。

森林と湖沼とより成る國土に住むフィンランド人は木製の小舟を造ることに熟達し、その爲め彼等は特有の一本の鉈を腰間に挟んで舟大工として歐洲各地に出稼するので、之も亦面白い事の一つである。

フィンランド人は自分等の祖先が東洋人であ

第十七圖

フィンランドの娘達



フィンランドの想出

ることを信じてゐるが、その體軀、容貌、皮膚の色とも寧ろチウトン系の白色人種に近く見える。然し其の言語は餘程ハンガリー語に似てゐて他の歐洲語とは全く異つてゐるのである(フィンランドのフィンもハンガリー又はウンガール

のハン又はウンも皆匈奴族^{フン}のフンと同源なる事は勿論であつて、彼等自らはスオーミ及びマジヤールと言ふ)。されば彼等には東洋人排斥の思想は全然なく、北方ラブランドに於いてはよくラブランド人と雜婚し、彼のスカンデナヴィア人の絶體にラブランド人を排斥するのとは著しい相異である。

一、フィンランドの獨立

ラームステット博士の語る所によれば一八〇九年フィンランドがロシア領となつてから以後、その壓迫から逃んとして自から奮ひ立つ元氣をフィンランド人に與へた原因は日露戦争に於ける日本軍の勝利にして、此の時フィンランドは完全なる自治を露國より奪取し、一九一七年十二月には遂ひに獨立を宣言したのである。ラームステット博士は此の獨立戦争の最前線に立ち、獨逸の援軍に化けて同國南西端より攻め上つたとのことで、先きに述べたエスコラ教授等も一度は捕へられて牢獄に投ぜられたのであつた。此

の建國の苦難と戦つた憂國の士は何れも日本國民に絶大なる感謝を表してゐるのであるが、一九三二年の末には未だ若い青年達の中に滿洲國の獨立に關し支那を氣の毒に思つてゐたものが少くなかつた様である。

フィンランド國民は帝政時代ロシアの政府に對して甚しい反感を持つて居たのに反し皇室に對しては何等反感を持たず、又たロシア皇帝も非常にフィンランドを好んで居られたのである。ロシア改革に於いて若し皇帝がフィンランドに亡命せられたならばフィンランド人は彼を戴いて共產黨と戦つたらうと語つた。

ラームステット博士の其の夜の話は更にフィンランドに於ける露國皇室の方々の夏の生活やバルト海岸諸國の獨立問題に及び盡くる所を知らなかつたが餘り長くなるから此の位にして置く。

然し此處に一つ注意したい事はフィンランド語を語る更に三百萬の人民がレーニングラード

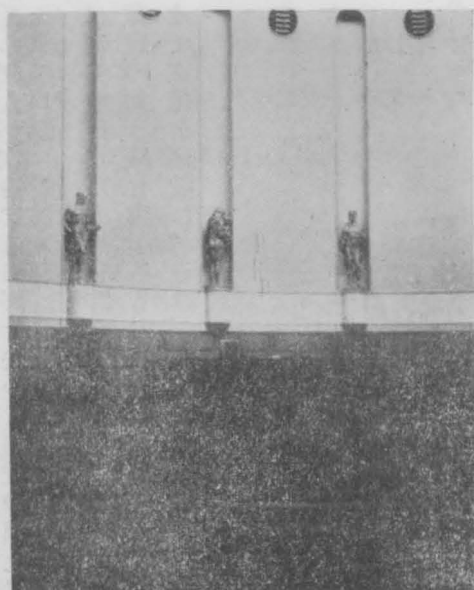
の周圍及びそれより北方の露國領内に居る事である。フィンランドの獨立に際し今日のレーニングラードをも取入れフィンランド人の全部を包含した大フィンランド國を造ることも考へられたのであつたが、レーニングラードなる大消費都市を持つことの財政的苦痛を怖れて敢へて之をなさなかつたとのことである。さればロシア國內に残されたフィンランド語國民は今甚だ不幸な境遇に居り、兩者の間には親類關係なども多いにかかはらず互に其の交通を阻まれて種々なる不幸を醸してゐるのである。

一二、最近のフィンランド

共和國として獨立せる以後のフィンランドは旺んに英米の資本を以つて産業開發を行ひ、例へば新興工業都市タンペレ市建設の一切の材料は無税を以つて輸入してゐるが如き思ひ切つた事を行つてゐる。されば將來はいざ知らず今日の國家的には甚だ財政困難の状態にある。然し其の新興の意氣は頗る盛んにして到る處に各種の

建造物が營まれて居り、又たその精神文化的面も頗る米國に倣ふ所が多く、一時禁酒制を敷いたのなどは其の尤なるものであるが、米國の禁酒令廢止に先立つて遂ひ之を徹去した。フィンランドからは各國のオリンピックゲームに多數の優秀なる選手を出して居ることは何人も知る處であるが、之と共に建築家、彫刻家、作曲

第十八圖 國會議事堂議場の三裸身像



フィンランドの想出

家等の有名な藝術家をも輩出せしめ、何れも主として北米合衆國で活動してゐるのである。我々がフィンランドに旅行した時漸やく出來上つた國會議事堂は其の内部の設備裝飾が近代式で頗る自慢のものであつたが、此處に一つの當惑すべき問題が起つたのである。それは大いに國民の尊敬を受けてゐる某彫刻家に依頼して議場の正面に飾るべき智、德、美を象徵する三つの彫刻を依頼した處出來上つたものは二體の男性裸像と一體の女性裸像だつたのである。勿論之は豫定の通り指定の位置に飾りつけられた事は圖にも示す通りであるが、フィンランドでは米國流に男女の代議士が席をつらねて議席につくのであるから此の裸像と向ひあつて國事を議することは代議士諸君にとつても少々テレクサイものであるらしく、屢々其の取除き要求が出で、當時は問題になつてゐた。

科學的方面ではフィンランドは地理學、印刷術、地質學、植物學の特に秀れた國であつて、

此の國人が寒冷なる母國を去つて溫暖の國土に移動すれば俄然其の天分を展すのである。それは宛も優秀なる人類を貯藏する地球上の一大冷藏庫の如き感を與へるもので、人類が南方に進んで文化を建設し、それが爛熟し、滅亡するに

第十九圖

ツルク市



從つて北方より絶えず清淨なる人類の種が供給せらるるものの如き感を抱かしめる。

ストックホルム通ひの船が出るツルクの街はフィンランド國第二の都市で人口も七、八萬あるであらう。其の街區名を北米のワシントン市の如く第一、第二、第三區等に分け然る後にA、B、C……街とした等頗る北米化された所がある。フィンランドの各都市は目下擧げて建設途上にあり時に多少植民地風景のある事を免れぬ。ツルクにはフィンランド語のツルク大學の外に此の國唯一のスエーデッシュ・アカデミーと稱するスエーデン語で教へる大學がある。前者は地理學者グラノー(Grano)博士が總長をやつてゐて、後者よりも遙に大きい。然し地質教室はなく、博士に紹介されてスエーデッシュ・アカデミーにハウゼン(Hausen)教授を訪ね小さいながらも頗る充實せる礦物陳列室を見せてもらった。

ヘルシンキの土俗博物館や、ツルクの博物館

にはフィンランドの田舎に固來使用されてゐる多くの日用品が陳列せられてゐる。其の大部分は木製品で我國に固來用ゐられたと同じ様なものも種々見出された。又た寫眞や人形で見るラブランド人の中には殆ど日本人と區別し得ないものもある。此の様なものを見るとフィンランドと我國とは又た一脈の連りがあるのかと考へられ地球上に各人種が展り行く事の不思議な運命を感じるのであつた。

一三、餘 語

十二月五日の夕刻、二十數日を過したフィンランドを去るため船上の人となつた。

風なき夕、鏡の様な海の上を島々の間を縫ふて船は走つて行つた。島々は鬱蒼たる樹木に蔽

はれた扁平な丘陵である。空と海と島と煙とは皆唯一色よりなる濃淡の墨繪であつた。盡きぬ名残を惜みながら食堂に入れば其處にはく電燈の燦く閃き美しい最後のフィンランドの晚餐が盛られてあつた。

貴重なる「地球」誌の一冊を借りて禿筆をふるひ自分にとつては忘れ難いフィンランドの想ひ出を綴り今之を終るに當り滞在巾常に厚き好意を給りたる石井康氏に深謝する。

本稿に記した地名は大體フィンランド讀みによつたが、唯ヴィプルクだけはスエーデン讀みにして仕舞つた。之れはフィンランド讀みではヴィフリ(Vipuri)である。又たフィンランドはスオーム(Suomi)である。(完)